徒用の部屋は十二室あり、 石田正幸が舎監に任命され、 て本校の寄宿舎 作 臨時職員 生作 作 臨時職員 、総頁参照)に寄宿舎を作ることを計画し、それが認められ この 業 業 雇 // 状態を解消するため、 徒員 徒 阿大森桑安海老 用竹田原川原 長後鈴前西西 塩朝石兼飯足有伊堀中鶴 片 斎 (男子寮) ができ、昭和二十四年五月に石川信夫と 栄四郎 はつの 得 重 昭正 Œ 嘉 4 栄 郎將夫典ねね 男 温 時 蔵 仁 吉 外一〇人 外 学校当局は赤羽の八島玉仙 校内居住生徒たちと共に入居した。 室に二、三名ずつ入居し、寄宿料は 五人 小使室 物俱楽部 標本室 梅林食堂内物置 雑屋建物 雜屋建物 職員食堂 倶楽部 職員食堂 職員食堂 陳列館別館 陳列館別館 二室五·五坪 八室六〇坪 寄 室四·五坪 二室二五坪 室四·五坪 一室三○坪 一室 八坪 室一〇坪 室 室 室室室 室三〇坪 室 室 贈 三八坪坪 三坪 四坪 地 初 所 3

二十五年三月末に二十一名、同年十月に十五名がなお居 住 し て いヵ月五十円(昭和二十四年度)であった。ただし、倶楽部内には翌

## 9) 文部省委託保管美術品

存しており、左記の五十四点が保管されていたことが 分かる。 録が無いので不明だが、昭和二十三年三月の保管委託更新文書が現 部省から検査に来た。この慣わしがいつから始まったかは正式な記 狭い土蔵があり、そこが収蔵場所で、会計係が管理し、 れた。また、現存書類によれば、これらの外に和 お、これらは後に文部省が引き取り、 部省の委託によって保管していた。現在の図書館玄関前に総二階 本校は文展、帝展、新文展における政府買い上げ作品その他を文 中沢弘光筆「思ひ出」が委託保管されていた様子である。 国立近代美術館へ管理替えさ 田 英 作 定期的に文 筆 おう ts

委託保管作品 (を示すと考えを)

27 26 25 24 23 22 28 辻 木 雪 飼はれたる猿と兎 名士古聖を弔 1 説 秋 n

野田 九浦筆 木島 桜谷筆

尾竹 国観筆 竹内 栖鳳筆

菊 竹

契月筆

栖鳳筆

29

油

断

74 73 72 71 70 67 66 64 61 60 59 55 54 49 44 42 41 40 38 36 34 33 31 星 兀 墨 春 管 島 渓 和 耕 宿 実 牡 を 田 季 Щ 氏 2 III 見 0

雨丹 性春 牛い雪朝ヌ語図月遊蛤 絃女翠れ冬灯

(色紙五十四幀張)

川 松 平合 岡福 星野 土 小 尾 坂 竹 太田 鈴木 三谷 山 西 不 池 鏑 菊池 Щ 口 観林筆 聴雨筆 主子筆 -糸子筆 翠嶂筆 映丘筆 秀畝筆 清方筆 契月筆 空外筆 麦僊筆 芝田筆 契月筆 華 百穂筆 明 良 正 玉 下陽筆 信筆 義筆 堂筆

23 22 49 12 11 9 5 2 29 23 16 85 81 80 79 4 1 55 46 33 30 洋 怒 土 土 流 Щ 始 手 鞦 画 麦灯 5 人の 人の I. カン 彫 西 15 刻 制 石 室 5 芸 洋 )顔(二) 顔 5 調 あ 0 来 文 画 品 良 (-)大 0 た 造 石 (同 男 み 字 雄 鐘 亭 伝 韆 朝雪 秋臣友 れ 7 図 右 膏

建畠 朝白井 草光 緒方 山同北同 朝 朝新 同中 耳野卯三 野 長 山西吉西 倉 倉 村 П 原孝太郎筆 口 村 沢 海竹太郎作 文夫作 文夫作 亮平筆 文夫作 謙造筆 忠夫筆 大夢作 不 信 右 望作 一郎筆 ·折筆 成筆 Щ 畝

## ⑩ 書道講習会と石橋犀水

術志向 術が発足する。 が紹介され、 倒の風潮が生じた。それは戦時中に著しい圧迫を受けていた西欧芸 術を手本とすることが行われ、 人であった。 和二十三年一月に、 の苦境の中から、やがて新しい動きが始まり、 は甚しい否定を蒙り、 て曲りなりにも安泰を誇っていた伝統芸術、 て芸術の分野ではまず民主化、 基づいて民主化、 - 世界性に立脚する日本絵画の創造」を期する画家の組織、 、戦によって軍国主義日本が崩れ去るや、 の解放でもあり、 歓迎されたが、 本校日本画助教授山本丘人はその主要メンバーの一 近代化政策を次々と打ち出したが、これに即応し 戦前における日本画壇の封建的因襲を払拭して 展覧会や出版物によって、 種の自信喪失に陥って低迷を来たした。 方、 恰も明治維新直後のように西欧 近代化の方法として西欧先進国の芸 戦中の日本中心主義に支えられ 政府はGHQの指令に 日本画、 日本画の分野では昭 西欧芸術の動向 書、 邦楽等々 創造美 そ 辺

けるよう運動もしている。 部省へ復活の請願に行った。 比田井天来の後任として本校図画師範科の習字指導を担 水である。書家、書道教育家として名高い犀水は、 書道界で最初にこの低迷打開に立ち上がったのは本校講師 彼は戦後小学校教育から毛筆習字が排除されるや、 によれば、 彼は同僚の 尾 上野直昭日記 上柴舟とともに、 (昭和二十二年十二月十 本校に書道科を設 昭和十四年から たびたび文 当し 石橋犀 て

> 陽 助員二十六名を置き、 は犀水だが、文部省社会教育局長柴沼直と上野直昭を顧問とし、 記 ルド・ダ・ヴィンチについて説く筈のところ停電で中止した旨 四・五二五号。平成五年十一、十二月)。 上野直昭も講師としてレ オ たという(「文部省・東京美術学校共催長期書道講習の回顧」『書学』五二 舟 た。 六月一日から十月二十二日までの間を前期 これは戦後の書道界発展の一つの契機となったと言われている。 三、二十四年の二度に亙って本校で開催した書道講習会であっ (星虔) によれば、 回は文部省、 彼 (十月二十、二十一日) 続木湖山、 辻本史邑、 要項が現存していないので詳細不明だが、受講者の一人寺沢秀 の書道復活運動の中で最も大きな効果をあげたのは、 鈴木翠軒、 浅見喜舟、 東京美術学校共催書道講習会と称して昭和二十三年 講師は石橋犀水、 そのなかに犀水は本校の中村 正 に記している。 上田桑鳩 田辺古邨、 高塚竹堂、 井上桂園、 村田良策、 この会の実質上の指 後期に分けて開催され 服部北蓮らであ 金田心象、 加藤常賢、 義、 昭 村 尾上柴 和二十 田 田讚 導 良

る。 受講申込み受付けの当日の様子を前出寺沢は次のように記してい

尾上柴舟らとともに名を連ねるというかたちをとった。

策

の前には、悲願の人々が押しよせ、騒然たる状況であった。未だ見席でもよいと、嘆願・哀願する人で埋めつくされた。犀水先生学生が殺到した美術学校の玄関受付は大混乱し、定員外でも、立学」を現出させた功績者、先生のもとに、全国から、書道内地留上野の森の中にある芸術人あこがれの学校、その中に「書道大